小川英文 2017 「青柳洋治先生追悼文: アジアに躍動する青柳先生、永遠に！」、『東南アジア考古学』37: 87-88

青柳洋治先生追悼文:アジアに躍動する青柳先生、永遠に！

小川英文（東京外国語大学）

青柳先生が逝かれた。奥様が亡くなられてちょうど1年だった。上智の学生ではないにもかかわらず、青柳研究室や山手の青柳家にわたしを出入りさせてくださり、実に楽しい時を長い間、過ごさせていただいた。これまでを振り返ると、実にわたしは青柳先生の愛情や寛容さの中で、なんの苦労もなく、思う存分に振舞わせてくれていたのだと、改めて感謝の気持ちが湧いてくる。いまだ悲しみの中だが、青柳先生のアジア各地での調査行をたどりながら、わたしが知る限りの先生の事績を偲びたい。

フィリピン考古学に馳せる夢

青柳先生は法学部出身だったという。その片鱗は後に先生が考古学に転じ、吉田章一郎先生の考古学実習の折に見ることができる。吉田先生が発掘とはどういうものかを説明していた。吉田先生:「考古学の発掘とは、遺物と遺構の状況証拠から、過去の出来事を推理するようなものだ」。青柳先生:「それは刑事事件の現場検証のようなものですね」。吉田先生:「まあそうとも言えるね」。このような会話が交わされたことを、酒席でよく語られていた。しかし青柳先生は、修論では考古学ではなく、屈原の『楚辞』について書かかれた。いつも先生が話していたことなので、わたしなりに妙に納得してしまい、なぜ考古学ではなくて『楚辞』なのか、聞いておく機会を逸してしまった。これはきっと先生の恩師、白鳥芳郎先生の研究課題との関連が予測される。

考古学に関しては、青柳先生の恩師はなんといっても八幡一郎先生である。縄文、弥生時代だけでなく、アジアからオセアニアまで、実に幅広い地域と時代にわたる考古学研究を行ってきた八幡先生の薫陶を傍で受けながら、青柳先生は有意義な60年代後半を過ごした。改めて思えば、八幡先生の影響を大きく受けている青柳先生ゆえに、問題関心も生涯を通して縄文、弥生、アジア、オセアニアと、師弟ともに同じである。ただ青柳先生は三上次男先生の影響も強く受けているため、当該地域の先史時代だけでなく、歴史時代における陶磁器の生産と流通ネットワークの研究関心が加わっている。

では青柳先生とフィリピンとの関わりは、八幡先生と友人であったドクター･フォックス(Dr. Robert Fox)をきっかけとしている。マニラで開催された先史学者会議でフォックスと知己を得た八幡先生が、フィリピンへ青柳先生を1969年に送り込んだのである。このあたりの話は先生によく聞かされてきた。横浜から船でマニラ港に向かった。波止場にはアテネオ･デ･マニラ大学に留学中の上智大学の後輩、宮本勝先生が出迎えた。マニラではフォックスの家に下宿しながら、フィリピン国立博物館人類学部門で考古学の調査･研究が始まった。フォックスとともに出かけた最初の調査地はタボン洞穴群であった。

すでにフォックスはタボン洞穴で更新世の人類骨を発掘しており、青柳先生はグリ、ドゥヨン洞穴の更新世から完新世にかけての不定形剥片石器群を発掘することとなった。その発掘には、ハーバード大学のモヴィウス(Hallam Movius)の学生ジョナサン･クレス(Jonathan Kress)も参加していて、1年以上ともにタボン洞穴群出土の剥片石器群の調査･研究を継続した。クレスは家族 3 人で、洞穴近くの網戸付きの快適な家に住んでいた。それができるのも、クレスは K マートの御曹司だからだと先生にお聞きした。後年、1983年にアリゾナ大のロングエーカー(William Longacre)の下にいた、わたしの先輩古城泰さんがツーソンに住むクレスに会いに行き、抜刷を受け取り、送ってくださった。わたしからクレスへの返礼の手紙で青柳先生とのタボン調査に言及すると、返信でクレスは青柳先生の近況を知り、懐かしく当時を語っていた。

青柳先生のマニラでの調査･研究は、タボン洞穴群出土遺物の整理のほかに、陶磁器時代(9～16世紀)の遺跡研究を中心としている。フォックスは 50 年代にカラタガン遺跡などのスペイン到来直前の墓地遺跡群をバタンガス州で､そして60年代にはマニラにあるサンタアナ教会内の埋葬址を発掘してきた。カラタガンでは明代の、サンタアナでは元代の陶磁器を多数副葬した、直葬伸展葬の埋葬址が多く出土した。この時の陶磁器研究の経験は青柳先生にとって、その後の東南アジア全域の遺跡出土陶磁の編年研究、そしてアジア海域世界ネットワーク研究へと結実する。しかしそれは青柳先生が帰国後、貿易陶磁研究会のメンバーとともに調査･研究を実施して以降のことである。出土した陶磁器を、中国、東南アジアの生産地と、日本や海外の消費地との比較研究によって年代を特定する作業を重ね、フィリピンの陶磁器出土遺跡を標識として、フィリピン先史時代最晩期の 9 から 16 世紀までの 5 期に分け、陶磁器

時代という時期を設定した。さらにはこの陶磁器時代という編年体系を東南アジア全域において検証し、海域世界ネットワーク論へと発展させて行ったのである。

ラロ貝塚群の調査

青柳先生と北部ルソン島カガヤン渓谷との関係は、ステゴドン化石と、ケーニヒスワルトがかつて提唱したカバルワン礫器文化の調査に始まる。この調査のきっかけはステゴドンの化石の発見が国立博物館に報じられたためである。フォックス以下、エバンゲリスタ、ペラルタ両先生、青柳先生と親友のカバニリア氏など、博物館人類学部門総出で調査が開始され、68 ヶ所のオープンサイトを発見し、発掘と表採による資料の比較研究が行われた。カバルワニアンの調査時には、ガソリンをアパリ港にあるエッソの貯蔵所まで取りに行く必要があった。カガヤン川を渡る橋はマガピットにあり、左折北上してアパリに向かう国道に出る。この道を行き来するうちに、マガピットの道沿いに貝殻が散布した場所を発見した。カバニリア氏と青柳先生は、カバルワニアンの調査の後、マガピット貝塚の調査に着手した。1972 年のことである。刺突文をもつ赤色スリップ土器やアッズ、石製･土製の玦状耳飾り等々、興味深い遺物が出土した。同じころの張光直の台湾調査の結果と突き合わせ、新石器時代における文化的類似が指摘された。その後、貝塚はマガピットからアパリまで、川の両岸に分布する大貝塚群であることが分かり、調査は現在も田中和彦先生によって継続中である。

図 1. ラロ貝塚群でエバンゲリスタ国立博物館副館長と

図 2. マガピット、バガッグ貝塚調査中 1986

海域世界ネットワーク論

青柳先生が 3 年間の留学から帰国する日は、マルコスが大統領在任を継続するために、議会と憲法を停止する戒厳令を布いた日であった。動乱男の先生が恩師フォックスの墓参で渡比した際は、ピープル革命勃発の当日であった。奥様へは八幡、三上両先生から無事を問う連絡が入った。恩師のお二人は革命の翌年、ラロ貝塚群調査中に相次いで物故された。青柳先生はひと月、酒断ちをして恩師の冥福を祈った。

80 年代以降の青柳先生は、貿易陶磁研究会のメンバーと共に東南アジアを中心に調査を実施した。三上先生とのスマトラ調査、辛島先生との南インド調査、岡田茂弘先生とのサバ･ブルネイ調査、長谷部先生とのベトナム調査、そして上智大アンコール調査隊での石澤先生･佐々木達夫先生とのカンボジア調査と多くの現場を重ね、陶磁交易の資料を収集し、ネットワークの実相を提示したのである。

ベトナム調査では鉄絵菊花文盤･碗の窯址を北部で探す調査、そして中部でチャンパ陶磁の窯址の発掘をメインとした。91 年から 5 年間、ハノイ考古学院とともにベトナム北部から南部まで、数多くの生産地と消費地の調査を行った。また新石器時代の海域ネットワーク研究では、83、86 年に国分先生と熊本大調査隊とともに、フィリピン諸島最北端、バターネス諸島の新石器時代遺跡の調査を行った。台湾とカガヤンを結ぶ中間点で、両島の文化的関連性を示唆する成果を得ることができた。83 年に国分先生が無くしたコンベックスを、86 年調査で焼畑の中で発見された青柳先生の喜ぶ様が、とても微笑ましかったことが思い出される。

青柳先生の事績は限られた紙幅では述べ切れるものではない。今回はいったんここで筆を置き、まずは先生のご冥福をお祈りしたい。